

カルデラの伝説・日本一の赤電話

吉友嘉久子

(OFFICE・よしとも代表)



6月の上山式を終えたころ、私は毎年のように水谷平に立つ。トロッコから降り、崖と谷のあわいに小さく残された軌跡のような台地を踏みしめて、空を仰ぎ、山の空気を胸いっぱい吸い込む。深い残雪の中で梢の新緑が芽吹き、ウグイスの大合唱に迎えられて、日常のあわただしさも消える……。

と、そのとき、うかつにも切り忘れた携帯電話が鳴って、意識が下界に引き戻されたことがある。

そう、カルデラでは数年前からケイタイが通じる。しかし、砂防工事が始まって100年になろうというこの地には、長い間、建設現場で労働に従事する作業員が自由に使える電話はなかった。このことを記憶にとどめている人は、関係者でもそう多くはない。ほんの30年ほど前まで、作業員たちは、家族のことを気にかけて様子を聞こうにも、建設会社の社員宿舎にある電話を借りて、気兼ねしながら話すしかなかったのだ。伝説の赤電話がやってくるまでは。

今から28年前、その赤電話は「水谷村」にやってきた。ボックスはなく、水谷出張所の外階段の下の壁に、裸のまま取り付けられた。雨の日にも濡れないようにという出張所の親心だったろう、外階段がひさしの役割を果たして、なかなかいい具合だった。

真新しい赤電話の前には、第1日目から順番待ちの行列ができた。遠く離れた家族の声が聞きたくて、誰も彼もが首を長くして待っていたのだ。

乳離れしたばかりの子を青森に残して山にはいった炊事係のカァチャンは、十数年ものあいだ夏場の5ヵ月間を、子どもの声を聞きたいと思いつつ耐えた。そして、息子が高校生になった年に、ようやく夢がかなう日が来た。

夜、夕食の片付けを済ませ、翌朝の下準備も済ませてから、この日のために用意しておいた10円玉を30個、エプロンのポケットに入れて外に出た。昼に力仕事をする作業員は朝が早い。もう遅い時間だから人はまばらだろう、とっていたら、なんと、まだ行列は長いままだ。待つこと1時間。なかなか赤電話に近づくことができない。夜風が肌寒く感じられて、「明日にするべ」と、第1日目はあきらめた。

次の日も、その次の日も行列に並んだが、赤電話にたどりつけなかった。4日目。とうとう順番が回ってきた。受話器を握りしめる。

「もしもし、元気か？」と涙声。「うん」と、押し殺したような息子の声が届く。あとは何を言えばいいのか、お互いにわからない。チャリン、チャリン。10円玉が落ちる音がやけに速い。「お盆に帰るとき、何が欲しい？」と聞く。「なあーんも」。ポツリ、ポツリと聞こえる声が、青年期に差しかかった男の子の複雑な胸の内を伝えてくる。「元気で頑張れ！ カァチャンも頑張るから、な」。それでおしまい。

あっという間に10円玉はなくなった。ポケットが空っぽになって、そのぶん心が満たされた。

毎晩並んでも順番が巡ってこず、1週間、夜に待ち続けた人もいる。

出稼ぎでふるさとを離れる父親を、幼かった子どもが、「とうちゃん、どこに行くんだ！」と追いかけてきた。切なかった。それからは毎年、子どもが寝ている間に出かけることにした。



いつものように後ろめたさを抱えて山にはいったその年、子どもの声を受話器の向こうから聞こえた。やんちゃな姿が目には浮かんで、ほおが緩んだ。1週間待った甲斐があった。「もうすぐ帰るからなー」。そう語りかけると、寂しがらせてすまないと思う気持ちが、少し軽くなった。

遠いふるさとに家族を残して山に働きに来た人たちにとって、赤電話は家族を結ぶ赤い糸そのものだった。たった1台の赤電話の前に、毎晩、10円玉を握りしめて順番を待つ人の列ができた。夜は通話料金が割り引きになるので大盛況。いつの間にか椅子も2個ほど用意された。待つ人も和気あいあいのニコニコで、お互いの家族を気遣った。みんながひとつの大家族だった。

家族への募る思いは、赤電話の料金箱を次々と10円玉で満たしていく。好成績の公衆電話を裸のままにはしておけない、と思ったからだろうか、やがて赤電話にボックスがプレゼントされた。ガラスの扉は、赤い糸でつながった一人一人の故郷への入り口だった。そして、赤電話はついに日本一の売り上げを達成し、カルデラの伝説となった。



今、水谷村に公衆電話はない。現場代理人は砂防工事の最前線から、ケイタイで事務所と連絡を取る。厳しい自然の中で刻々と変わる現場にあって、ケイタイは心強い助っ人だ。

出稼ぎに来ている人も、それぞれが家族とつながっている。仕事が終わればポケットからケイタイを取り出し、「きょうも無事に終わったよ」と家族にメールを送る。毎晩必ず子どもの声を聞くという若いパパは、ピアスの耳にケイタイを押し当てて「クワガタ持って帰るからね」と話す。

赤電話が姿を消し、光ケーブルが引かれてIT化も進んだ。しかし、昔も今も、水谷村で働く人たちの温かさは変わらない。変わらないものは、もう一つある。カルデラの厳しい自然だ。その中で人の魂は寄り添い、暖め合う。いつ果てるとも知れない崩れも、地球のリズムの中でいつかは安定するだろう。しかし今を生きる人間は、それを待てない。現に身に及ぶ危険があり、それを防ぐ手立てがあるからには、厳しい自然にも挑まなければならないのだ。

平野に住む人たちの安全を守るために、カルデラで働く人たちがいる。その人たちと家族を支えた伝説の赤電話は、実はケイタイに姿を変えて、今も一人一人の心に寄り添っている。私にはそう思えてならない。絵物語『カルデラの赤電話』は、こんな思いから生まれた。



立山黒部アルペンルートは観光シーズンにはいった。ひとりでも多くの人に、弥陀ヶ原の展望台からカルデラを見下ろしてほしい。いつにも増して深い雪の中で、カルデラは、すでに目覚めている。

豪雪に襲われたカルデラでは、いくつもの新たな崩れが発生しているという。鉄柱が倒れて送電線も寸断され、復旧の見通しが立たないなかで、立山砂防の最前線基地、水谷村は、今年、工事が始まって100回目の春を迎えた。

イラスト・仲野順子